

# 鹿大の チカラ

KAGOSHIMA  
UNIVERSITY

多島圏研究センター

## 河合 溪 准教授(46)



南太平洋に浮かぶ楽園、フィジー諸島共和国。リゾート地として人気があるが、島内沿岸の人々から、今も共同体による土地所有制度と自給自足生活という、昔ながらの経済システムが色濃く残っている。

環境汚染や生態系への影響など、今の時代は地球レベルで考えるべき問題が山積みだ。「そんな時代だからこそ、人と自然のより良い共生関係とは何か、実践している地域から学ぶことが必要ではないだろうか」。そう考えた河合溪准教授が注目したのがフィジーだった。

### 自然との共生

さらに、多くの研究者が参加するが相互の交流があまりない学際研究よりも、異なる分野の複数の研究者を交え、多様な視点から一つのテーマを追う「学融的研究」という手法がおもしろいのではないか。まだ例の少ない学融的研究の手法を確立し、新たな人と自然の共生関係について提言したい、という狙いもあった。

「人と自然の関係は、自然の生態条件とそれを利用する人間の文化や社会が密にかかわる。真の解説には様々な視点が大切」と、同じ大学の法文学部や水産学部の研究者に呼びかけ、05年度から3ヵ年計画で研究プロジェクトを始動した。

研究対象地に選んだのは首都

## フィジーの漁村に学ぶ



フィジーの海に潜り、海中の様子を調べる鹿児島大の調査チーム=河合溪准教授提供

スヴァ近郊の漁村。村の目の前には、干潟にマングローブ林、サンゴ礁という自然が広がる。人と自然の関係を調べるために、貝類のカイコノや芋の一種のキヤッサバなど、村の代表的な資源を対象に、資源量や収穫(漁獲)量などを貨幣価値に換算し、比較研究を試みた。「貨幣価値に換算することで、人がそれぞれの環境をどれだけ利用しているか、把握する指標となると考えた」

その結果、村民の住居に近い

フィジーではマングローブ林の伐採やサンゴ礁の破壊がほとんど見られない。なぜ、多様な生態系が良い状態で保たれているのか。その答えの一つが、この国特有の自然利用システムだ。フィジーの約8割を占める先

国の伐採やサンゴ礁の破壊がほとんどの見られない。なぜ、多様な生態系が良い状態で保たれているのか。その答えの一つが、この国特有の自然利用システムだ。フィジーの約8割を占める先

住民の土地は、マタンガリと呼ばれる血縁関係によって共同所有され、複数のマタンガリが集まり村を構成している。村での移動手段は手こぎの竹船が主流。住居から遠い干潟やサンゴ礁などの利用度が低い要因の一つだ。

フィジーではマングローブ林の伐採やサンゴ礁の破壊がほとんど見られない。なぜ、多様な生態系が良い状態で保たれているのか。その答えの一つが、この国特有の自然利用システムだ。フィジーの約8割を占める先

の伐採やサンゴ礁の破壊がほとんどの見られない。なぜ、多様な生態系が良い状態で保たれているのか。その答えの一つが、この国特有の自然利用システムだ。フィジーの約8割を占める先

の伐採やサンゴ礁の破壊がほとんどの見られない。なぜ、多様な生態系が良い状態で保たれているのか。その答えの一つが、この国特有の自然利用システムだ。フィジーの約8割を占める先